九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

銀の鈴

小牧, 健夫

https://doi.org/10.15017/2557081

出版情報：文學研究. 11, pp.47-52, 1935-04-10. 九州文學會
バージョン：
権利関係：

銀の鈴

小牧健夫

暗い舞臺である。左手の家の入口の階段に、黒い衣に包まれた二人の女が立つてゐる。少し離れてひとりの男が疲れた様子をして壁に凭りかかつてゐる。黒い背景の前の三つの寂しい黒い影のまはりに、一しきり上から表現派式の大きな三角の雪片が墜ちて來る。やがて雲が切れると月が射して、舞臺一面に明るくなる。

黒い男は俳優コルトネルの扮したジョン・ガーブリエル・ボルクマンである。否、ボルクマンに扮したコルトネルであると云ひ換へた方が一層適切かも知れない。何故かといへば、この俳優の大時代の藝風は、イブセン物を演じてゐる時ですら、曾て觀た『テル』劇の惡代官ゲスレルの役を屢想ひ出させる程コルトネル張りだからである。しかし今はそんな批評の目をつぶつて、イプセンの世界へ、美しい、だが寂しいイリュージョンの世界へ身を置かなければならない。

ボルクマン、この「病める狼」、「はじめての戰場に傷いて不具となつたナポーレオン」は、八年の監獄生活、更に八年の蟄居生活の後に、この夜はじめて戸外に出て、寒い月の光を浴びて立つてゐる。身も心も疲れ切つてゐる風である。

ふたりの女はいふまでもなく、ボルクマン夫人と、その妹のエルラである。夫人は、家を棄てて遠く南の方へ旅立たうとする息子を追かけて引き留めようとする。エルラは留めようとしても所詮無駄であると云つてやめさ

せようとする。

鈴の音が聞える。銀でなければ聞かれないすずしい響である。

エルラ。（耳を澄ませて）鈴の音のやうですね。

夫人。（叫ばうとする調子を抑へて）それではあの女の橇だね。

エルラ。外の橇かも知れません。

夫人。いいえ。キルトン夫人の橇に違ひない。あの銀の鈴の音はわたしの耳に覺えがある。それ、よく聞いて御覽、今にこの下を通つて行くでせうよ。この丘の下を—

鈴の音は次第に遠ざかつて行く。小ボルクマンと、キルトン夫人と、若い娘のフリーダを乘せた橇は、雪の上を滑つて、それぞれ違つた意味で生活の破産者である三人を後に殘して、空の青い南の國へ、人生へ、幸福へ向つて、遠く走り去つたのである。

書記フォルダルが現はれた。そのあわてた態度、輕い調子は、息詰まるほど重苦しいこの場面を緩和する一の人物でなければならない。それにしてもこの男は何といふ割のわるい役割をつとめてゐることだらう。彼はここへ來る途中「正面から橇が飛んで來て、雪の中に引くりかへり、眼鏡はとんでしまふ、蝙蝠傘はこはれてしまふ。おまけに脚を傷めた」のである。橇は此男を轢き倒しておいて、留まりもせず雪烟りを立てて走つて行つた。さうしてこの橇車の窓帷の中には、倒された書記の娘のフリーダが居たのである。

『ジョン・ガーブリエル・ボルクマン』はどういふ問題を取扱つてゐるのだらうか。

イプセンの大抵の劇がさうであるやうに、此作も一口にいへば、夢みる人の悲劇である。『海の夫人』や、『ヘダ・ガーブレル』と同じく、實生活の法則を無視した夢想家の失脚の悲劇と云へよう。または『建築家ゾルネス』のやうに、天才の主我主義の破綻の悲劇とも呼び得るだ

らう。牢獄の中でも、その後八年の蟄居の間にも、ボルクマンは絶えず自分の爲した行爲を反省して見た。或は峻嚴な檢事となり、或は同情ある辯護士ともなつて。しかも公平な裁判長として彼が自分に下す宣告はいつも無罪であつた。銀行頭取である彼が横領の爲に幾百人の株主を破産せしめたのは彼の目から見れば犯罪ではない。「それは俺が威力を有つて居たのだから仕方がない」のである。彼は横領した金で目ざましい事業を企て、幾萬の人を幸福にしようと夢想してゐた。彼の目的が達せられれば、引出した金は元の金庫に返されるから、毫厘の損失も他にかけないで濟んだのである。事が敗れて獄窓に繫がれるやうになつたのは彼自身の罪ではない。卑怯な裏切者の責である。世人が彼を罪人扱ひにするのは彼が心外に堪へないことであつた。要するに「俺は誰にも解つてもらつた事がない。それが俺の不運だ」といふのである。

かういふ考を有つた超人が、自らの夢に躓く悲劇が『ボルクマン』である。それ故ある人は此作を「資本主義のプロメートイス」の悲劇とも呼んだ。

個人對社會の問題は、イプセンがその作に於ていく度びか繰返し取扱つてゐるが、詩人自身の發展に伴つて、この問題に對する態度も自づから變らざるを得なかつた。その跡を辿つて行くことも興味があらうが、私は今その點には觸れない。私はここでは此劇からもう一つ外の問題を取り上げて見ようとするのである。それは何か。世代（ゲネラチオーン）の問題である。

銀鈴の響を乘せて南へ去つた櫨には、ボルクマンの息子のエールハルトがゐる。母は此子を立派に教育して榮達を遂げさせ、父の罪科のために蒙つた一家の汚名を雪がせて、自分の受けた世間の侮辱を拭ひ去らうとした。彼女の復活の希望は一に息子の立身出世に懸つてゐる。

何よりも先づ地に塗れた家門を興すのがエールハルトの天職でもあると考へてゐた。

しかし息子は母の吹く笛には踊らない。「僕は若い身です。他人のした事の償ひに、僕自身の一生を拋つことは出來ません」と云つた。

伯母のエルラは、曾て戀人のボルクマンを姉に奪はれた復讐として、此青年を母の手から奪ひ取らうとした。けれども彼は、「叔母さん、あなたほど僕に親切にしてくれた人はありません」と感謝しながらも、「今になつては、あなたの爲に、自分を犧牲にすることは出來ません。あなたの子になつて、あなたを大事にするのを僕の爲事にすることは出來ません。」と云切つた。叔母の家には「薔薇や、ラヱンデルの香りがして」、窒息しさうな自分の家の空氣とは違つてゐるにしても、「しかし部屋の空氣は部屋の空氣ですからね」と云つて、廣い自由な世界へ出て行かうとした。

父は父でこれから始めようとする新生涯の爲事の助手として息子の力を籍りようとした、けれども彼は「それは出來ません」と止めを刺した。「僕は若い身です。僕だつて一度は生きて見度いのです。自分の生活を生きて見度いのです」爲事は彼にとつては苦役であり、生きることの反對であつた。「僕は爲事などしたくはありません。只生き度いのです。」

かうしてエールハルトは自分に取り縋る三人の者の願を却けた。さうして雪の上に黑い三つの影を印して立つてゐる三人の耳に、銀の鈴の音を響かせながら遠く往つてしまつた。彼と行を共にしたフリーダも自分の父を轢倒して驀地に走り去つた。『建築師ゾルネス』で、戸を敲いて師匠を脅かさうとした「後に來る世代」は、ここでは前にある人々の生ける屍を越えて進んだ。殘された者の悲しみはボルクマンのいふやうに「誰でも人生の路を歩いて居れば、一度は車にひかれることがあるのだ。その

時は起き上つて、何事も無かつたやうな顏をしてゐる外はない」といふ諦念で暮やすことが出來るだらうか。

漸く老境に入らうとする人の心理を描いたゲーテの小說『五十歲の男』が老年のゲーテにして初めて書き得るやうに、『ボルクマン』は七十歲のイプセンにしてはじめて書き得るやうな劇である。

此作の背後に、霜髮の作者の苦笑が歷々と見えるやうだといふ人がある。

しかし、この「父と子」の悲劇に於て、作者はただ單純に後に來る世代の榮えを頌へたものであらうか。

幸福へ、自由へ、人生へと銀の鈴は鳴つてゐる。それにしても南の國で若い二人を待つてゐるものが、眞の幸福であり、自由であつたらうか。若し彼等の描いた美しい夢が無殘に破られた曉はどうであらう。牢獄より冷かな運命が彼等の行く路に待伏してはゐないであらうか。父はその夢の爲に生活の戰のために敗れた。子もまたその夢のために亡びないことを誰が保證し得るであらう。

ある人は悲し氣にほほゑむアイロニーがイプセン劇のすべてを通ずる根本の氣分であると云つた。さういへば作者が皮肉な微笑をたたへてじつと橇の行くへを見送つてゐるやうでもある。一切の幻影を破つて赤裸々の人生を見守らうとしたあの鋭い眼で——

※　※　※　※

國立劇場にボルクマン劇を見たのは、もう季節は冬を過ぎて、辻に立つ花賣の籠に、すずらんやさくら草の花束が見られる頃だつた。

舞臺の上では雪が降つてゐた。橇の鈴が鳴つてゐた。さうしてそこで演ぜられてゐるのは、シュレンテルもいふやうにどこから見ても冬の戲曲である。老年の戲曲である。

この戯曲の冬の天地には、一陽來復の春も回つて來ないやうに見える。「氷の手で心臓を掴まれて」雪の中に倒れた主人公のやうに、そこからは何か寒いものが身内を襲うて來る感じがする。

しかし戸外にはもう温い風が吹いてゐた。季節の移り變りを無造作に送り迎へる歐羅巴の都會の人達も、此頃だけは長い、暗い一と冬を見送る悦びに心を躍らせ、季節の動きを深く強く感ずるのだつた。かういふ「春のはじめの一日は、その後に來る全一と夏よりも、はるかに大きな力を、人の心と感覺に及ぼすものである。早春の一日は、或人々にとつては、自然の象徴を理解する人にとつては、花ざかりの彌生の一日よりも、ずつと印象の深い、不思議なものである」（ゴルツ『幼年の書』）

さういふ一日に私はまた、ラーベがしばらく住んで處女作『雀小路の日記』を書いたシュプレー街を探しに出て行つた。

四月と云つてもここではまだ早春である。まだ冬と春とが交錯する頃である。「一つの顔は土色をして不機嫌に、過ぎゆく冬をかへりみ、一つの顔は若々しく、嬉しさうに、近よる春にほほゑみかける、兩面をもつた、ヤーヌス神のやうな月」（ラーベ『雀小路の日記』）である。「霜と、崩ゆる綠、燃えさかるストーヴの火と松ゆき草、聖灰祭の嘆きと復活祭の鐘とを絡み合はした」（同上）やうな月である。

シュプレーの岸に近い小公園では、それでももう楡、楡、などの樹がすつかり若やいで、その艶々しい嫩葉は柔かな日ざしに輝いてゐた。

ボルクマンの「夢の國を埋めつくした」去年の雪も、もはや何處にも殘つてゐないやうに思はれた。私のこころは、橇の行くのをさまざまの思で送つた三つの黒い影から離れて、あらゆる「問題」の彼方に、何はあれ、この蘇へり來るもの、崩えいづるもの、芽ぐむもの、伸びゆくものを悦ばずにゐられない。銀の鈴が鳴る。新しく生れる生命を祝ふやうに、銀の鈴が鳴る。（舊稿）